

審査の結果の要旨

氏名 中 島 直 人

本論文は都市計画における「美」の概念と、市民の一般的な「美」の概念との間のあるべき関係の探求の第一歩として、日本における「都市美運動」について、その理念及び実体を明らかにすることを目的としている。ここで、都市美運動とは、日本において、大正期以降の一定の期間、都市美協会の主唱、主導のもとで開始、展開された、「都市美」の実現を目標とした社会的活動をいう。

論文は論文の目的と構成を述べた第1章と、都市美運動の体勢的展開を述べた第1部と3人の都市美運動家の活動に焦点を当てた都市美運動の個性的展開を述べた第2部とから成っている。

第1章は、序説であり、本研究の意義および研究上の課題を明らかにしている。同時に既往の先行研究をまとめ、世界史としての都市美運動をはじめ、全国史、結社史、人物史としての都市美運動という4つの視野と都市計画における「美」と市民と「美」という2つの視座を明らかにしている。

第2章から第5章までは第1部を構成しており、都市美協会の活動の変遷を詳細に明らかにしている。

第2章は、都市芸術理念の生成と都市美運動の初動について論じている。とくにシビックアートのアメリカでの生成とその日本への伝播を明らかにし、そこかわがくにの都市美運動が胚胎していく様子を明らかにしている。

第3章は、東京市における都市美委員会の設置に関してその経緯を明らかにし、そのなかで都市美運動がどのように進展したかを述べている。東京市との関係を強化していく中で、**1932年**の大東京市の成立を契機として、市民意識の向上のために市によって都市美運動が選択された事情が明らかにされている。

第4章は、全国都市美協議会の開催とそこにおける都市美運動の多元化について論じている。**1940年**の東京オリンピック開催が**1936年**に決まったところから都市醜の排除と根本的な都市風景改変為の都市計画の重要性が論じられるようになり、都市美の問題が全国レベルで多元化した様子が明らかにされている。

第5章は、戦時中から戦後にかけての都市美運動の再生と衰退の歴史を明らかにしている。**1964年**の東京オリンピックを準備する段階で首都美化の気運が高まり、東京都に首都

美化審議会等が設置されたが、清掃等による美化にとどまり、都市計画的な施策による都市美化は回避され、都市美運動はその後衰退した過程が明らかにされている。

第6章から第8章までは3人の都市美運動家の思想と経歴を明らかにした第2部である。

第6章は、都市美協会の創立者であり東京市建築技師であり後に都立大学教授に転じた石原憲治についてその思想と都市美運動に関する経歴を明らかにしている。石原憲治はW.モリスの思想を基盤とした社会芸術としての都市美運動理解から出発し、のちに景観概念の展開を図り、次いで公德運動と美観計画を提案するに至る思想を詳細に明らかにしている。

第7章は、同じく都市美協会の創立者であり、新聞記者でありのちに文筆家として活躍した椽内吉胤についてその思想と都市美運動に関する経歴を明らかにしている。とりわけ、大都市の環境改善思想から都市美の運動に至り、後には都市の個性としての都市風景思想へと変化した椽内吉胤の思想を詳細に跡づけている。

第8章は、都市美協会とは一線を画した商業都市美運動を展開した東京都建設局長であり後に早稲田大学教授に転じた石川栄耀についてその思想と都市美運動に関する経歴を明らかにしている。特に石川栄耀の商業都市美運動の理論と実践に関して、日本で初めて詳細に明らかにした。

最後の第9章は結章であり、都市美運動とは、都市計画における審美的観念の導入運動であり、同時に公共的精神を有した市民の育成運動であるという結論を導き出している。

以上の総括によって、本研究は日本における都市美運動の総合的歴史を初めて明らかにしたものであるとして非常に貴重であり、その過程でさまざまな新発見の資料を提示しており、今後の都市美関連研究を大きく進展させるものとして高く評価できる。同時にそのような都市美認識に立ちつつ、今後の都市における「美」の追究に関して一定の視座を提供しており、さらに実際的かつ有効な提言を数多く行っている点で非常に有用であるといえる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。